

## 成熟した人間像のとらえ直し

山本孝子

### 抄 録

人間の生涯発達に関しては、様々な議論がなされてきている。本論文では、まず人間の生涯発達のとらえ方に関する議論について、アイデンティティ発達、道徳性発達の両面から検討した。次に、日本におけるアイデンティティ発達の研究のうち、自我の二指向性の観点および関係性の視点からなされた研究を概観した。そのうえで、本論文では、成熟した人間像を新たにとらえ直す必要性を訴え、人間の生涯発達においては、「自律・分離志向的発達」と「関係志向的発達」の両側面をバランスよく獲得することが重要であると結論づけた。さらに、そのためには、これまで重要視されてこなかった後者の獲得に、より重点をおく必要があるとして、人間学的な視点からケアすることの意味を考察した。

**キーワード** 成熟した人間像のとらえ直し、関係志向的発達、ケアすることの意味

### I はじめに

従来の発達論は、西洋的、個人主義的な価値観の影響を受け、「自律・分離」を達成することを最優先課題とみなす傾向が強かった。もともと Erikson, E.H. は、人格発達における他者との関係性の役割を重視していたのだが、その後の研究者たちによってその側面は見落とされがちであった。しかし、そのような価値観の偏りが、周りへの配慮の視点の欠如をもたらしたことへの

反省から、われわれは「自律・分離」の側面の獲得を重視するだけでは不十分であることにより気づきはじめていたのである。

今日、「共生」という言葉が多用されるようになってきた背景にもそのような問題意識が根底にあると思われる。岩波哲学・思想事典（1998）によると、現代的意味での共生は、「自他が融合する『共同体』への回帰願望ではなく、他者たる存在との対立緊張を引き受けつつ、そこから豊かな関係性を創出しようとする営為である」と考えられる。そのためには「各人が互いに相手を、自分とは異なる独自の観点をもった自律的人格として配慮しあう作法」（井上ら、1992）が必要である。われわれは、それぞれが尊厳ある独立した不可侵の存在であることをまず認め、そのうえで互いの違いを理解しようとする姿勢をもたなければならない。相手の考えを一生懸命理解しようと思ひやる。思ひやっても理解できない部分はたくさんあるが、だからこそ、そこからそれぞれが違った存在であることの理解を深める。そういう姿勢を忍耐強く持ち続けることが必要である。そのような姿勢をもつためには、真の成熟した人間像とは何か、われわれ人間が何を獲得すべきなのかを熟考する必要がある。

そこで、本論文では、まず人間の生涯発達のとらえ方に関する議論について、アイデンティティ発達、道徳性発達の両面から検討する。次に、日本におけるアイデンティティ発達の研究のうち、自我の二指向性の観点および関係性の視点からなされた研究を概観する。そのうえで、本論文は、成熟した人間像を新たにとらえ直すことを目的とする。

## Ⅱ 人間の生涯発達のとらえ方に関する議論

### 1. アイデンティティ発達に関する議論

#### (1) Eriksonのアイデンティティ発達論

Erikson は、彼の著書『幼児期と社会』（1950）において個体発達分化の図式を掲げ、彼独自の発達論を展開している。この図式の中で Erikson は、人間の心は生涯を通じて発達していくものであるとし、その過程での社会との関わりの側面を重視した。

Erikson によれば、ライフサイクルにおける8つの発達段階に、それぞれ

固有の心理・社会的危機が存在するという。その中で本論文で注目するのは、青年期に当たる第Ⅴ段階のアイデンティティ対アイデンティティ拡散、成人初期に当たる第Ⅵ段階の親密性対孤立、および中年期に当たる第Ⅶ段階の世代性対自己陶醉である。

アイデンティティの獲得、すなわち「自分とは何者か」というテーマは、今日では青年期にとどまらず成人初期や中年期の人々にとっても切り離すことのできない重要なテーマである。Erikson (1959) によれば、「自我同一性とは、自我のさまざまな総合方法に与えられた自己の同一と連続性が存在するという事実と、これらの総合方法が同時に他者に対して自己がもつ意味の同一と連続性を保証する働きをしているという事実の自覚である」とされる。つまり、アイデンティティとは、自分が自分に対して、同一性と連続性を持つ存在であるという感覚を持つだけでなく、同時に他者によってもそれが認められなければならないという社会的側面を含むものである。Erikson は、自己を失ってしまうという不安を抱くことなく自己のアイデンティティを他者のアイデンティティと融合させ得るかどうかが次の親密性の発達を左右すると考えた。Erikson (1959) が、「異性との真の『親密さ』（または、これに関連した形で、ほかの人との親密さないし自分自身との親密さ）が可能になるのは、適切な同一性の感覚が確立した後だけである」と述べたのは、まさにこの理由によるものである。

しかし、その後 Erikson (1968) は、それまで抜け落ちていた女性の発達についても考慮に入れて「内的空間説」なるものを発表した。それによると、「女性の身体には、自分が選んだ男性の子どもを宿すべき内的空間 (inner space) があり、この空間が心から歓迎するものを選ぶことができるようになったときに、アイデンティティが獲得される」という。すなわち、Erikson は、女性の発達においては異性との親密性を体験することによってアイデンティティがより確かなものとなるとして、それまでの自身の考え方を補完した。

また、Erikson は、第Ⅶ段階の中年期の心理・社会的課題として「世代性」をあげている。Erikson (1964) が「人は、他を教えなければならない」と述べているように、世代性とは子どもを生み、はぐくんで、次の世代への関心を高めるということである。Erikson は、各発達段階の人格的特性を活力

(virtue) として示しているが、彼の示す第Ⅶ段階において獲得されるべき人格的活力は、はぐくみ (care) であるとされる。Erikson (1964) は、はぐくみを「愛や必要のため、また、偶然によって生み出されたものへの広がる関心である」と定義し、はぐくみは「放棄できない義務感に伴うアンビバレンスを克服する」と述べている。

このように、Erikson は、人格発達において、他者との関係性の役割を重視している。しかし、それにもかかわらず、彼の提唱したこの側面は、その後の研究者たちが自律や他者からの分離の側面に焦点を当てすぎるあまり、見落とされがちであった。そのことに異議を唱え、関係性の側面に再度光を当てて、女性のみでなく男性の発達にとっても重要な要素として見直そうとする動きが出てきている。Erikson が、人間の発達の中にケアのテーマを含み込んで考えていたことが、今日の研究において関係性が注目され直すことにつながったと言える。

## (2) Josselson の関係性の新しい見方

Josselson (1973) は、女子大生のアイデンティティ形成に関して精神力動的な見地から研究し、女性のアイデンティティ形成は男性のアイデンティティ形成と質的に異なることを示唆している。それによると、男性のアイデンティティが学位や経済的成功のような客観的基準で確認されたり否定されたりするのに対して、女性のアイデンティティは重要な他者の反応によって決まるという。さらに Josselson は、男性のアイデンティティ形成は直線的であるが、女性のアイデンティティ形成は同心円的であると比喩的に表現している。

また、Josselson (1973) は、女性のアイデンティティ発達の過程において、Erikson の個体発達分化図式の第Ⅴ段階のアイデンティティ獲得と第Ⅵ段階の親密性獲得が並行して進むことを主張した。それによると、女性は異性との親密さを体験することによってアイデンティティがより確かなものとされるのであり、配偶者を選択するまでははっきりとした自己定義ができないという。これは、先にあげた Erikson の内的空間説を支持するものである。

さらに Josselson (1992) は、男性と女性のアイデンティティの確認の仕方についての質的な違いを次のように述べている。「男性は、彼らの注意が外

部の何かにともに焦点づけられるとき親しく相互的であることができる。一方、女性は関係に焦点が当てられるとき最も深い結びつきを感じる」。つまり、男性は外的な何かを一緒に「する (do)」ことによって、女性は他者とともに「いる (be)」ことによって、それぞれのアイデンティティを表現するのであり、そうすることで最も自分の存在をとらえることができるのである。

このように Josselson (1994) は、アイデンティティ形成における男女の質的な差を指摘しながらも、男女いずれのアイデンティティ形成にも共通する関係性の8つの次元について説明している。それらは、①抱きしめ (holding)、②愛着 (attachment)、③情熱的な経験 (passionate experience)、リビドー的結合 (libidinal connection)、④目と目の確認 (eye to eye validation)、⑤同一化 (identification)、⑥相互性 (mutuality)、⑦埋め込み (embeddedness)、⑧世話すること (tending, care) である。Josselson によるこれら8つの次元は、アイデンティティが関係性の中から現れることを示唆するものである。しかも、その最高の次元は慈しみ・ケアであり、他者に対する関心や感受性、世話することへの責任を伴う結びつきを意味し、後述する Gilligan が示したように、判断の際に自分自身よりも他者の声に注意を払うことのできる高度な次元である。

Josselson (1994) は、8つの次元を「抱きしめ、愛着、埋め込みへの要求は、アイデンティティへの枠組み、つまり人間が考え、感じ、自分自身をよく知るための輪郭や基盤を与える。目と目の確認は、人が他者によって与えられた認知に自分自身の感覚を調和させる過程である。理想化と同一化は、自分自身になっていくためのブーツの革ひもの役割を果たし、情熱的な経験に含まれるリビドー的欲求は、自己表現のための燃料を補給する。最後に、相互性と世話することはアイデンティティの表現であり、他者とともにいて分かち合うこと、相手の世界へ手を伸ばしたり、逆に相手を受け入れたりという複雑な人間関係の相互作用に自分自身の力を注ぐこと、関係的な世界や互いの空間の中で、最も自分自身を感じるものをとらえることである」と説明している。

この Josselson の関係性からの新しい見方は、アイデンティティ発達にとって「自律・分離」と同時に「関係性」も重要な側面であることを示唆してい

る。また Josselson は、アイデンティティ形成において男女の間に質的な差があることを示唆している。

### (3) Franz と White の複線 (two-path) モデル

Franz & White (1985) は、Erikson の理論は単一の発達経路しかもたず、愛着 (attachment) に関する視点が抜け落ちていることを指摘し、Erikson の個体発達分化図式を応用して複線 (two-path) モデルを提案した。その複線モデルは、個別化経路とアタッチメント経路からなり、そのそれぞれに 8 つの段階が設定されている。その中で、Erikson の個体発達分化図式の第Ⅵ段階である「親密性対孤立」と第Ⅶ段階である「世代性対自己陶醉」がアタッチメント経路の方に組み入れられている点が注目される。アイデンティティの発達を個別化経路とアタッチメント経路、つまり「自律・分離」と「関係性」の両発達プロセスの相補性によるものととらえた点、また、なによりも両プロセスを同等の価値あるものとみなした点はこれまでにない画期的な視点として高く評価される。

この節では、アイデンティティ発達に関する議論を検討してきたが、道徳性発達に関しても同様に、従来の「自律・分離」を発達の指標とする考え方に対して、「関係性」の視点をその指標に取り入れようとする議論がなされてきている。そこで、次の節では道徳性発達に関する Kohlberg と Gilligan の説を検討する。

## 2. 道徳性発達に関する議論

### (1) Kohlberg の発達段階論

Kohlberg は、人間に共通して備わっていると考えられる「道徳性」について発達段階論を展開した。Kohlberg は、彼独自の調査研究から、人類に普遍的に認められる「道徳性」の発達形式を 6 段階に表した。それは、以下である (村井, 1990)。

#### 第 1 段階 罰と服従の方向性

身体に加えられる罰によって「善い」「悪い」を決定しようとする段階

第2段階 功利的相対主義の方向性

「善さ」を自分の要求の満足によって、また、ときに他人の要求の満足によって決める段階。人間関係は「取引」のように見られる。公平や平等などの考慮も行われるが、いわば、「五分と五分」の取引、つまり物質的功利的取引以上のものではない。

第3段階 「よい子」への方向性、あるいは間人間的一致

周囲の他人に喜ばれたり、認められたり、助けになったりすることで、行為の「善さ」を決める段階

第4段階 「規律と秩序」への方向性

権威、規則、および社会秩序の維持に関心を向け、「善さ」を、義務の遂行、権威の尊重、秩序の維持などを基準として決める段階

第5段階 社会契約的・法律的方向性

一般に功利的色彩をもつ。個人の権利という観念にしたがって、あるいは、社会的に承認した基準を用いて「善さ」を決めようとする傾向が強い。個人の価値観や意見の相対性についての意識が明瞭であり、したがって、意見の一致への手続きを強く要求する。

第6段階 普遍的・倫理的原則への方向性

「善さ」は、倫理的包括性、普遍性、一貫性に訴えて、自分で選んだ倫理的原則にしたがう良心によって決められる。この原則というのは、黄金則（「己の欲するところを人に施せ」）や、「至上命令」（「汝の意志の格率がつねに同時に普遍的立法の原理として妥当するように、行為せよ」）等の実践規則のように、抽象的で普遍的なものである。

Kohlberg は、自らの立場を認知論的発達理論と称し、人が道徳的判断をする際に、その背後に認められる認知的な構造に焦点を当てた。道徳を、相対立する主張について普遍的かつ妥当性のある解決方法を見出そうとする正義の原理に関わるものとしてとらえたのである。Kohlberg が6段階の道徳発達形式を打ち出すもとになった数々の研究の一つに「ハインツのジレ

ンマ」がある。この「ハインツのジレンマ」という例話を10歳から16歳の少年たちに聞かせ、子供たちが正義という観点から、目の前にある相対立する権利や義務を、どのような道徳的判断を用いて解決しようとするかを調査した。以下は、その例話である。

ハインツの奥さんがガンで死にかかっています。お医者さんは「最近開発された薬を飲めば助かるかも知れませんが、それ以外に治療の手立てはありません」と診断しました。ところがその薬を発見した薬屋は、これに開発費用の10倍もの値段をつけていました。そこで、ハインツは薬を買うためにできるかぎりのお金を借りて回ったのですが、売値の半分の額しか集まりません。彼は薬屋に事情を話し、薬を売ってくれるよう交渉しましたが、断られました。困り果てたハインツは、愛する妻を救うために薬屋の倉庫に忍び込み、薬を盗んだのです

(Kohlberg, 1984; 川本隆史, 1998)。

この例話を聞かせた直後に、子どもたちはハインツは薬を盗むべきであったかどうかの判断と、そう判断した理由を尋ねられた。Kohlberg は、その理由づけに注目した。上述の6段階の道徳発達の形式をこの例話に当てはめると次のようになる。第1段階では、罰によって「善い」「悪い」を決定する。すなわち「奥さんを死なせたら、周りから非難されるから盗むべきだ」や「警察につかまるから盗むべきでない」などの判断がこれに該当する。第2段階では、一種の取引的な考え方、たとえば「盗めば妻の命は助かる。それによって万一捕まったとしても情状酌量になるだろうから、盗む方が得である」や「捕まれば妻が悲しむ。悲しみのあまり体調をくずし死んでしまっっては元も子もない」などの判断がその例である。第3段階は、社会からよいと認められるか否かを基準として判断する。つまり「よい夫なら愛する妻のために盗むのは当然である」や「捕まれば社会から後ろ指をさされるから盗むべきでない」などの判断がこの段階である。第4段階は義務、権威、社会秩序の維持などに関心が向き、「妻を助けるという夫として当然の義務を果たすべきだ」や「盗みは社会秩序を乱すからしてはいけない」などの判断がこの段階に該当する。第5段階は、個人の価値観から「盗まずに妻を見殺しにするこ



とは自尊心を傷つける」や「法を犯すことで、自分の立場を失うことになる」などが、第6段階では普遍性や倫理原則から「このような状況では、盗むことも道徳的に正当化される」や「妻への思いだけに固執せず、他の同病の患者のことも配慮すべきであるから盗むべきではない」などが該当する。

このように Kohlberg は、人間の道徳性が普遍的に上記に示したような6段階を低い段階から高い段階へと発達していくものであることを主張した。

しかし、Kohlberg の発達段階論は、男子の被験者のみを対象として構成されたものである。それにもかかわらず、これを普遍的と称する Kohlberg の理論に異議を唱えたのが Gilligan である。

## (2) Gilligan の Kohlberg 批判

Gilligan (1982) は、道徳は実際には二つの道徳的指向から成り立っているにもかかわらず、Kohlberg 理論はその一方にしか目を向けていないと批判した。Kohlberg が目を向けたのは、従来の心理学理論、特に Freud, S. や Piaget, J. が強調する「公正という道徳」である。しかし Gilligan は、そこには女性の声は反映されておらず、女性の判断や行為を理解する際に重要となる「配慮と責任という道徳」が見落とされていると指摘した。

Gilligan (1982) は、Kohlberg の「ハインツのジレンマ」という例話を11歳の男児と女児に追試し、二つの道徳的指向について説明している。それによると、ジェイクという男児は、最初から「ハインツはその薬を盗むべきだ」という意見を持っており、その理由についても「人間の命はお金よりも尊いからだ」と明確に述べた。一方、エイミーという女児は、「ハインツは盗んじゃいけないと思うわ。……もっと別の方法があるんじゃないかしら。……でも、ハインツの奥さんも死なせてはいけないと思うし」と答え、「財産でも法律でもなく、むしろ盗みをする事の、ハインツと彼の妻との関係に及ぼす影響を考慮した答え方」をした。ジェイクは「道徳的ジレンマを『人間についての数学問題に類するもの』であると考えて、それを一つの方程式にくみだてて、その解をだす作業を進める」。一方、エイミーは「ジレンマのなかに数学の問題ではなく人間に関する、時間を超えてひろがる人間関係の物語をみている」。この場合、Kohlberg の尺度ではジェイクの判断は「第3、第4段階の混在した段階のもの」として評価され、エイミーの判断はジェイクよ

りも1段階低い「第2、第3段階の混在した段階のもの」と評価されてしまう。

しかし、Gilligan (1982) はこれに対して「エイミーの判断は、思いやりの倫理の中核をなしているある種の洞察を含んでいるように思える」と評価している。これについては、Ivey (1986) も「エイミーの概念の方が認知的には複雑であり、より多くの問題と要因の関連が絡んでおり、ジェイクが示すような単純な線形の推理には従っていない」と評価している。

Kohlberg の発達観では、「自律・分離」がその考え方の中心に置かれ、「他者との関係においては、自他を分化し自律－個性化の過程をたどること、思考や判断に関しては自分を状況から切り離して状況を客観的、合理的にみられるようになること」（日本道徳性心理学研究会，1992）が発達であると考えられている。しかし、Gilligan (1982) は「女性の他者－世界との関係の仕方や関係のとらえ方は、そのような発達の方向性と基本的に異っている。男性は発達とともに他から離れていくのに対し、女性は他者と関係をもつことを志向しつづける」と述べている。

以上見てきたように、Erikson が人格発達における他者との関係性の役割を重視していたにもかかわらず、西洋的な男性優位の考え方の中で自律や他者からの分離にのみ焦点が当てられ、関係性の側面が見落とされがちであったことへの反省から、また、アイデンティティ形成における男女の質的な差の存在も示唆されていることから、女性の発達の特質についても考慮した発達理論が展開されつつある。

日本でも、最近「自律・分離」と「関係性」の両側面から弁証法的な視点で人間の発達をとらえようとする研究が多く見られるようになってきている。次章では、日本におけるそのようなアイデンティティ発達の研究の動向をとらえ、発達理論における課題を検討する。

### Ⅲ 日本におけるアイデンティティ発達の研究の動向

#### 1. 自我の二指向性の観点から

##### (1) Connected-Self と Separated-Self

山本 (1988) は、青年後期女子のアイデンティティを一体性・分離性という構成概念を用いることにより、その両次元の発達のあり方の違いという観

点からの把握を試みた。山本によれば、一体性とは「他者との結びつきの中に自己の存在を見いだすというあり方」、分離性とは「自他の明確な区別の上になりたつ個性の中に自己の存在を見いだすというあり方」と定義される。上記の研究の結果、アイデンティティの発達過程は、両次元の「相対的比重関係を含むより複雑な過程であること」が示唆された。

引き続き山本（1989）は、青年期から成人期までの男女を対象として、Gilligan（1982）等を参考にして自己の二面性を表す Connected-Self、Separated-Self の両側面を定義し、それを意識の面から測定する尺度を作成した。山本（1989）によると、「Connected-Self は、1) 愛着と共感性の発達に基礎づけられ、2) 他者の欲求・願望を感じ、その満足を目指す反応的行動（思いやり、世話）として現れ、3) 自己と他者とは互いの具体的な関係の中に埋没し拘束され責任を負う存在として把握される。一方、Separated-Self は、1) 分離－個体化の発達に基礎づけられ、2) 他者の反応や外的統制によらない、自律的行動（積極的自己実現・力の発揮）として現れ、3) 他者は自己と同等の互いに不可侵の権利を持った存在として、抽象的一般的に把握される」という。

この尺度を用いた研究の結果、アイデンティティの発達を成人期以降も続く一生を通じた過程としてとらえる Erikson（1950）の見解をほぼ支持するものであったとしながらも、Erikson のいうアイデンティティの確立から親密性、世代性を経て統合に至るという発達の道筋は一樣ではなく、男女間でやや相違が見られたことを示唆している。

## （2）相互協調的自己観と相互独立的自己観

三枚（1998）は、30代、40代、50代の成人女性を対象に、自己に関する相互協調的自己と相互独立的自己の二側面とアイデンティティとの関係の変化、およびそれらの関係のライフスタイルによる差異について検討するため、尺度を作成し実証的な研究を行った。三枚（1998）は、自己の二側面について木内（1995、1997）を参考に、次のように定義している。つまり、相互協調的自己観（interdependent construal of self）は、「自己を特定の他者、特定の社会的文脈と連結した共生的存在と理解し、特定の社会的文脈における他者との関係が維持され、実現されるような行動主体として自己を理解す

ること」であり、相互独立的自己観 (independent construal of self) は、「自己を特定の他者や特定の文脈から分離された、自律的、個別的存在と理解し、その固有な内的な属性が実現されるように行動が組織され、制御されるような行動主体として自己を理解すること」であるという。研究の結果、自己の二側面とアイデンティティの関係については、「全般に、2つの自己観を強く合わせ持つ人は、同一性の感覚が強く、逆にいずれの側面も相対的に弱い人は、同一性の感覚が弱くなりがちである」ことが示唆されたという。また、ライフスタイル別の検討の結果では、専業主婦に関して記述すると、「30代では相互協調性のみが自我同一性の基盤となりがちであるが、40代では独立性が自我同一性と結びつきやすい」という結果を得ている。そのことについて三枚は、「従来の伝統的な女性役割である母・妻役割が、現代では女性の同一性にとって安定した基盤となり難く、家庭内に留まることが葛藤すら引き起こしうるという状況 (村山、1987) は、これらの結果から特に40代に顕著と考えられる」と述べ、「子育ての一段落などによる心的役割の変化」を反映したものであろうと考察している。このように三枚は、年齢によっても多少傾向が異なることを示唆している。

### (3) 個人志向性と社会志向性

伊藤 (1993a) は、個人志向性・社会志向性という概念を提起した。伊藤 (1998) によれば、個人志向性とは、「自他分離方向に志向し、個性的・主体的に“個”を生かそうとするあり方」であり、一方、社会志向性とは、「自他合体への志向を意味し、社会で共有された規範や“他者との関係性”を重んじ他者との調和的共存や社会への適応を目指すあり方」であるという。伊藤 (1993b) は、個人志向性・社会志向性尺度を用い、二次元的な観点から青年期から成人期にかけての人格の発達過程の検討を試みた。その結果、二志向性の平均得点は、個人志向性と社会志向性を二軸とする二次元平面でとらえた場合、年齢の増加とともに対角線上を右上に向かって移送することが示された。

また、性差については、男子の場合には、「個人志向性・社会志向性とも青年前期に急激な (量的) 変化を示し、成人中期では、両志向性が関連を強めつつ、他律から主体的な相互依存へ、個人本位から個性的な自己実現へと

いう質的変容を見せる」(伊藤, 1997) という。これに対して女子の場合には、「志向性得点が急激に変化する時期にずれが見られ、社会志向性は青年期、個人志向性は成人中期に有意な上昇を示す。つまり、やや他律的で個人本位的傾向がある青年前期には社会志向性が変化し、社会的役割を重んじ自己実現が目標とされる成人期には個人志向性が転換期を迎えるという、2段階的な発達過程を示すことが見出された」(伊藤, 1997) という。

この結果をふまえて、伊藤(1993c)は、発達を個人化と社会化との二次元から考えることを提唱している。伊藤は、この視点により、従来の単一線形モデルによる発達図式ではとらえることのできなかった「発達の多様性と可塑性」ととらえることができると考える。つまり、人格発達は「この2つの志向性をより糸とする1本のロープのような構造をもつものであり、これらの均衡と弁証法的結合が、個人の発達を方向づける」と述べている。

さらに伊藤(1994)は、そのように「人間の発達を“個人化と社会化という2本のより糸が練り上げられていく過程”(伊藤, 1993b)ととらえる」ためには、横断的な調査では不十分として、二志向性尺度と大野(1984)の充実感尺度を用いて短大生を対象にその2年後を含めた縦断的な研究を行った。その結果、個人志向性・社会志向性ともに平均点は上昇したが、有意な差が見られたのは社会志向性のみであった。また、充実感尺度と両志向性得点の間には、ともに有意な相関関係が見られ、とくに個人志向性との相関が強いという結果が得られた。このことから個人志向性の高まりは充実感に強くつながるが社会志向性も充実感を与える要因の一つになっていることが示唆された。

また、伊藤(1994)は、葛藤状況における行動パターンと二志向性との関連について示しているが、「発達の未熟な状態では、自己と他者、個人と社会の接触や、そこで経験する葛藤をうまく処理することができず、不適応や対人関係からの退却、あるいは忌避的な行動を示すが、2志向性を伸ばし成熟した人格を獲得するにつれ、他者の中で自己を活かすような道を開いていくことが可能になる」と述べ、二志向性得点の高低の組み合わせによる行動パターンの分類を試みている。

このように、伊藤は人間の発達をとらえる際の両志向性の共存的な高まりと両者のバランスの重要性について主張してきた。二志向性研究の問題点と

今後の課題として、伊藤（1998）は、質的データおよび成人後期以降のデータを加え、二志向性の「たんなる共存ではない“弁証法的に統合された”状態の具体像を、実証的かつ質的に示すこと」を挙げている。こうした統合への動きは、これまで注目されることの少なかったアイデンティティ形成における他者との関係性の問題へ目を向けさせることになった。杉村（1998）が指摘するように、このような視点があらためて注目されなければならない背景には、「分離や自律を過度に強調する、西洋的な男性優位の個人主義のために、欧米の研究者たちがこの理論における他者との関係の側面を見逃してきたという歴史に対する反省がある」と考えられる。

## 2. 関係性の視点から見たアイデンティティ発達

### (1) 女性のケア役割とアイデンティティ発達

岡本（1991）は、成人女性のアイデンティティ発達を検討するに当たっての今後とりくむべき課題として、「母親行動や女性性が、自我同一性の成熟にどのように寄与するのか」という問題を挙げている。岡本（1991）の研究の結果では、「育児への積極的関与型と自我同一性達成度や女性役割特性の間には関連が見出されなかった」という。これについて岡本は、「育児という仕事は成果が確認しにくく、また目に見える評価も得られにくい」とであろうと考察している。しかしながら、子どもを育てることは、アイデンティティの成熟に貢献するであろうことから、人格のより深い次元での考察の必要性を指摘している。

また岡本（1995）は、育児や介護など世話役割がアイデンティティの支えになりにくいこと、また、社会において世話することの意義や価値の認識が浅いことの要因として、「心理学研究に『生活』の視点が欠けていたこと」を指摘している。生活的自立能力は、従来の心理学研究では軽視されてきたが、実際には「危機を乗り越える力となるばかりでなく、他者への思いやりや感謝の心につながる」力であると、その視点の重要性を主張している。

さらに岡本（1996）は、育児期の女性のアイデンティティ様態を、個としてのアイデンティティの達成と、母親としてのアイデンティティの達成という二次元からとらえ、「育児期の女性のアイデンティティ様態の状態像」の検討と「育児期の女性における上記の二つのアイデンティティの統合のあり

方と家族関係に見られる特徴の関連性」の考察を試みた。その結果、「夫との肯定的な関係や家族に対する積極的関与は、個としてのアイデンティティと母親としてのアイデンティティの統合を支えるものであることが示唆された」と述べている。

加えて岡本（1997）は、①高齢者介護にたずさわることによる介護者の側の成長・発達感の実態、②高齢者介護による成長・発達感に関連する要因」について検討することを目的とした研究を行った。この研究は「関係性、特にケアすることによるアイデンティティの発達を実証的に検討するための基礎研究」と言える。その結果、「他者を尊重し、より深い関係性をもてることが、介護という大きな困難をともなう役割のストレスを軽減し、さらに自分自身の心の発達を促進させることが示唆された」と述べている。これらは、支え合うことが成長を促す一助を果たすことを示すものと言えよう。

平山（1999）は、「育児期の核家族において、『家族内ケア』が夫婦間でどのように担われ、女性は『家族内ケア』に伴いどのような感情を経験し、『家族内ケア』に対してどのように考えているかを明らかにするための研究を行っている。その結果、行動的次元と感情的次元の間に次のような関係が見られた。すなわち、女性は家族の世話をすると、「夫婦間相互の情緒的ケア行動が活発であるほど、ポジティブな感情をより多く経験し、反対に不活発であるほど、ネガティブな感情が経験される」ことが明らかとなった。つまり、女性は「夫から『ケアされる』ことなく、ひとりで家事・育児を担っているほど、家族のために世話・配慮をすることに対して否定的になる傾向があること」が示された。このことは、「育児を中心的に担う女性自身もまた、だれかによってケアされる必要があること」を示唆している。

数井ら（1996）も、「親役割を負担に感じたり、自分の生き方を模索しているような母親にとって、そのような自分を理解し、受け入れてくれる夫を持つか持たないかで、親ストレスの度合いがずいぶんと変わってくることは当然のことかもしれない」と述べている。

## （2）関係性の視点からの男性研究の動向

上述の研究は、主として女性を対象としたものであり、男性は女性を精神的にサポートする存在として登場したにすぎなかった。関係の中での発

達という視点からの男性を対象とした、あるいは対象に含めた研究は、村松ら（1990）、牧野・中原（1990）、柏木・若松（1994）、小野寺ら（1998）など、ごく少数である。牧野・中原（1990）は、「母親にとっては、子育ては自己中心的な自分の視野や世界を拡大させ、それまでに形成されたパーソナリティを再構築させられるような大きな影響力を持つ」ものであるが、父親の場合、そのような「性格的、精神的変化」をあげた者は少なく、この違いは子育てへの関わり方の違いによるものであらうと考察している。このことは、Field（1978）の見解と一致する。Field は、父親を一次的養育者である者と副次的に養育に関わっている者に分け、この父親 2 群と一次的養育者である母親群とを子どもとの関わりの様式について比較した。その結果、子どもへの関わり方が性差によるよりも養育の責任を一次的にとるか、副次的な立場にいるかによって規定されるということを示した。このことから、育児をすることがアイデンティティ発達に影響を及ぼす度合は、育児への関わり方の違いに大きく左右されと考えられる。実際、関連する研究の中には、たとえば河野（1993）の「親役割に関する研究 一母親の就労と父親の家事・育児参加一」や福丸ら（1999）の「乳幼児期の子どもを持つ親における仕事観、子ども観：父親の育児参加との関連」などのタイトルに見られるように、父親は家事・育児の主体ではなく単に参加する者としてとらえられているものも少なくない。

また、渡部ら（1996）は、これまで親の養育態度が子どもの発達に与える影響について検討した研究は数多くあるが、親の側の成長が問題にされることが少なかったことを指摘している。

以上のことから、母親だけでなく父親をも含めて家事・育児・家族への気遣いなど「ケアすること」の主体としてとらえること、また、「ケアすること」のアイデンティティ発達との関連について検討することは、今後の研究における重要課題であると言えよう。

### 3. 「自律・分離」と「関係性」の発達の弁証法的関係

先に筆者は、自我の二指向性の観点からの研究を検討してきたが、それらはいずれも個の確立、関係性の維持という二方向を示すものであり、いずれの研究においても、その二つの側面は複雑にからみあっていることが示唆さ



れた。もとより、Eriksonの発達理論は心理・社会的理論と呼ばれるように、アイデンティティは自己完結的なものではなく他者との関係性の中で形成されていくものであるとされ、そのことからすれば、複雑な様相が見られたことは当然の結果であると言える。アイデンティティ発達の研究に当たっては、個の確立＝男性的課題、関係性の維持＝女性的課題というような二分法的なとらえ方をして、Erikson理論の本質を損ねることのないよう十分注意しなければならない。

アイデンティティと親密性の順序の議論も、個と関係性に関わるものである。Eriksonによれば、後者の親密性の達成は成人前期の発達課題であるとされるが、これはつまり、他者との親密な関係においても、自分自身を失うという不安を感じずに、なお自分自身でいることのできる力の獲得を意味する。つまり、親密性の前提として、揺るぎないアイデンティティの獲得が必要であるということになる。

高橋（1988）は、Matteson（1977）やSchiedel & Marcia（1985）の先行研究等を参考に、「同一性地位と親密性地位との連関」を男女別に検討している。その結果、多数の先行研究が全体的同一性地位において、男子では同一性形成から親密性形成へと直線的な関係を示すことを明らかにしたのに対して、高橋の研究結果では、男女とも親密性の獲得へのアイデンティティの獲得の必要性を示唆しながらも、先述のJosselson（1973）に見たように「女子では同一性地位の高低と親密性地位の高低とが関連なく進展する」こと、さらに女子は男子の直線的な関係とは異なって「複雑な様相を呈する」ことを明らかにした。

伊藤（1999）は、これらの順序性に関する議論の背景として、「同一性と親密性という概念そのものの問題点」を指摘している。つまり、その後の親密性に関する研究で、「友人関係の有無とその親密性の深さ」に視点が向けられたため、「Eriksonが強調した“自己放棄に耐えられうる滅私性、他者との融合にも揺るがない自我の強さ”という点は、理論的背景には組みこまれてい」ず、そのため「同一性はより精神的、親密性はより行動的・現象的にとらえられ、この相反性ゆえに両者が非連続的であるという印象を与えることになった」と述べている。そして、これらの研究が「それぞれの概念をより具体的に実証する点では大きく貢献した」としながらも、それらの「相

互性についても、より深い考察が求められる」としている。

現実の相互構成は、個人の内側・外側、そのいずれにおいても起こり得るものであり、「同一性と親密性」も発達経路において緊密な関係を保ちながら弁証法的に相互構成されつつ進行していくものと考えられる。伊藤の言うように、「この過程を線形モデルで論じ尽くすにはかなりの無理」があり、その多次元的な複雑な様相を表すのに適切なモデルの一つとして、弁証法的かつ相互構成的視点を重視する Ivey (1986) の統合モデルが注目される。

#### IV 成熟した人間像における関係志向的発達の側面の重要性

##### 1. 成熟した人間像の偏り

この章では、これまでの考察をふまえ、真に成熟した人間像について考える。成熟した人間像をとらえ直す際、哲学的人間学的な関心と手法が役に立つ。哲学的人間学は、「人間をみなそれぞれに異なった意味と価値をもって経験される世界、絶えず生成変化する『状況』の中にある存在と考え、この人間がそこで何を経験し志向しているかを分析し解釈することを通して、その人間の本質、基本的な生の構えを知ること、そうすることで現代人が失ってしまった相互の信頼と理解、対話と協力を取り戻すことを哲学の今日的な課題と考えるもの」(和田, 1998a) である。Langeveld (1958) は、「人間学とは、どのような意味連関が人間の世界を構成しているか、この意味連関の条件となっているものは何であるか、また、どのような人間が、一方ではこの意味を創造し経験しつつ、他方では逆にそれから創造されながら、この意味を通じて再び自分を発見し直しているかを、『経験的』に確かめようとする学問である」と述べている。本論文における人間のとらえ方も、このような関心に基づいている。人間像を考える際に前提とされていることは何か、またそれが人間の生き方にどのような影響を与えているかということを問題としている。それはつまり、ある問題について考える際、「何らかの理由から人間に表われる種々の現象が、人間の全体的な理解のために何を意味しているかが問われる」(Bollnow, 1969) ということである。

人間を対象とする場合には、「全体を全体として記述する」(西之園, 1999) ことや「対象をあるがままの現象としてどのように認識するか」とい

うことが重要になる（西之園，2000）。Ivey（1986）は発達心理療法に弁証法的なとらえ方を用いたが、その際“現状適応”を安易に治療の定義とするのではなく、「個々の問題を概念化するときの前提と仮定を、真面目に検討する試み」を、「より実行可能な答えの探求、および真実の探求」という意味において重要視している。Ivey（1986）によれば、「人間と環境についての対話あるいは弁証が示唆するところは、人間は環境に影響し、環境は人間に影響し」ており、その関係は、「おびたしく力動的であり、変化しているが、ともに常に統一された全体」であるということである。このようにIveyも、「絶えず生成変化する『状況』の中にある存在」としての人間を「あるがまま」に「全体を全体として」とらえようとしている。「人間を世界から『作られつつ作る』ものとして歴史的文化的、発展的創造的に理解しようとする」（和田，1994）努力と言えよう。

人間の発達を、「自律・分離できること」という視点のみでとらえるとならえ方は、果たして「状況」の中の人間を「あるがまま」「全体として」とらえているのであろうかという点が本論文の問題である。本論文では、自律・分離に心を向ける発達のあり方を「自律・分離志向的発達」、関係に心を向ける発達のあり方を「関係志向的発達」と表現するが、従来「自律・分離志向的発達」を重視する考え方の中では、関係に心を向けることは依存的で未熟とされた。しかし、Gilligan（1982）は「高い方がよい」という観念の正当性を疑った。Gilliganの発達モデルを、Ivey（1986）は「個人の存在は、『高い』レベルの存在と成長に移ろうと努力する一方で、どのように始点に戻るかを説明している。成長は『上向き』だけでなく、おそらく水平および『横向き』、すなわち潜在力の自然な拡張として、最も正確に説明されよう」と解説している。このような視点で人間の発達をとらえる際、上向きの「自律・分離志向的発達」の側面のみからのとらえ方は人間の発達の全体をとらえておらず、横向きの「関係志向的発達」という側面からも合わせてとらえることの重要性が示唆される。人間は上向きに発達することばかりでなく、横向きに深く探求することもバランスよく果たさなければならないのである。

Jung（1977）の人生の午前と午後という考え方では、価値探求の方向が中年期である正午をもって変化すると述べられている。「人生の午前」において直線的・量的拡大ばかりを求めていた者は、「人生の午後」における価値

の転換に困難を来す場合が多い。「人生の午前」の時期から、関係志向的な価値の探求を並行して行っていくことが人間の生き方において重要である。

人間は環境と切り離せない存在であり、周りのあらゆるものから常に何かを取り込みながら発達し、独自のものになっていく。しかし、このことは「逆説的には、この分離した独自性の多くは、他の存在と非常に深く関わっている発達の路から生じている」(Ivey, 1986)ということでもある。その関わりは、自分から周りのものへ関わることと、周りのものから関わられることの両者を含む相互関係的なものである。

成熟した人間像の偏りを問い直すことは、Gelpi (1973) が「抑圧と解放の関係を絶対的な対立として固定的に捉えるのではなく、相対的動的発展的に考え」ることにより、「現実的で多様な展開の可能性」(和田, 2000)を示したのと同様、発達に関する問題のとらえ方にも広がりを与える。たとえば、自立と依存はこれまで両極的なものと考えられがちであったが、相対的な概念であるのとらえることができる。この二つの概念は、常に変化する弁証法的関係において存在する。互いに片方のものがなくては存在しえないものである。このように考えれば、自立を強調し、依存をマイナスと見るのではない別のとらえ方が可能になる。自立と依存を単なる相反するものの葛藤として見るのではなく、成長していく過程におけるプラスの葛藤としてとらえることができるのである。

安定性への欲望と変化への欲望についても同様の考え方ができる。「人生は絶え間のない欲望の弁証法である」(Ivey, 1986)と考えれば、安定性への欲望と変化への欲望の葛藤を否定的にとらえるのではなく、プラスの葛藤としてとらえ、成長していくことができるのである。重要なことは一方が良いもの・優れたもので、もう一方は悪いもの・劣ったものというとらえ方でなく、両者のバランスが大切であるということである。「自律・分離志向的発達」と「関係志向的発達」のバランスをとるためには、これまで見過ごされがちであった後者に重点を置く必要がある。そこで、次に関係志向という点でより具体的な概念である「ケア」について考察する。

## 2. ケアすることの意味

これから21世紀を生きようとするわれわれ人間にとって、これまでの自

律・分離志向的な生き方の一方で、今後むしろ重視されなければならないのは、他者をケアすることにより人間として成長する関係志向的な生き方である。ケアという言葉には、大別して「気懸り」という意味と「気遣い」という二つの意味がある。他者の「気懸り」(care)を「気遣う」(careする)ところにケア概念の相互関係の構造が存在する(村田, 1994)。水野(1991)は、ケアには、他者の「気懸り」に巻き込まれてしまうくらい、他者との距離をつめて気遣うという主体的な気構えがあり、それが他者の心の中に浸透することにより「相手の心がまるで自分の心の延長のように感じられ、二人にして一つの精神的な共同世界を現出するとき、ケアがはじめて成り立つ」と述べている。ケアは、包み込むような温かな感性と、それにもとづく心身の全体で他者に対面する全人格的な対応なのである(水野, 1991)。そこには、上下の関係や、強者・弱者というような立場の構造は見られない。「あくまでケアする者とケアされる者とが、人として平等の地平を切り開くとき、はじめて深い人生の縁をいただく者同士の出会いが生じ、そうした関わりが新たな結びつきをもたらして、互いの人格的關係を成就する営みとなる」(水野, 1991)のである。特に、Mayeroff(1971)の考え方には、この平等な人間関係にもとづくケアする者とされる者の相互関係が強調されている。そのような人格的關係のためには、相手を信頼するということが不可欠である。Mayeroff(1971)は、「ケアには、その相手が自らに適したときに、適した方法で成長していくのを信頼することがふくまれている」と述べている。ケアは、支配や教化とは全く異なるものであり、信頼のうえに成り立つものである。

人は、他者の成長を助けることによって自分自身を実現する。けっして、自分自身を実現するために相手の成長を助けようとするのではないことに注意しなければならない。他者のケアをすることを通して自己の人生の充実がはかれるのである。すなわち、ケアするということは、他者との関係性の中で、相手の自己実現を助ける努力を通して、自己を変革する過程なのである。そこでは、ケアの実践者である自分自身は脇役であり、ケアを受ける相手自身が主体である。この姿勢は、自分自身の自己実現ではなく、他者の自己実現を助けることを第一義とする点で、自己実現の心理学を超えるものである。人間が人間である所以は、「単に理性的であることではなく、理性を

も超えることのできる自己超越の可能性、直接的な功利をこえて無私的な他者への愛に生き得ること」(和田, 1980)にあるのである。

また Mayeroff (1971) は、ケアが中心となって人間の他の諸価値や諸活動を位置づけ、「その位置づけが総合的な意味を持つとき、彼の生涯には基本的な安定性が生まれる」と述べている。しかし、従来の自律・分離志向的な発達のとらえ方のもとでは、この位置付けはケアを中心としてはなされていなかった。日常のケアを伴う様々な思考や行為は、十分に意味のあるものとしてはとらえられていなかったと言える。今われわれは、この意味について問い直す必要がある。Frankl (1946) は、価値実現の態度について、「創造的価値」「体験価値」「態度価値」の三つを挙げている。Frankl によれば、「創造的価値」は物を作り出すことの中に実現されるものであり、「体験価値」はすでに作られた存在するものを感得することの中に実現されるという。そして、「態度価値」は人間が変えることのできない運命に対していかなる態度をとるかによって実現されるものであるという。生きる姿勢としては、三つの中で最も受け身的な「態度価値」の実現が Frankl によって最も価値的に優れているとされるのは、「価値実現の完成がたとえどんなに制限されようとも、態度価値を実現化することは可能でありつづける」からである。忍耐によって自己の苦悩を成し遂げようとする人間は、自己自身の内なる世界を充実へと変転させる。

水野 (1991) は、ホモ・サピエンスの生き方とホモ・パティエンスの生き方の違いについて次のように説明している。ホモ・サピエンスは、知的・合理的・功利的人間で、苦に直面することを嫌い、もっぱら技術と政策で苦を切り抜けようとする。それに対してホモ・パティエンスは、自己あるいは他者の苦に直面したときに逃げ出さず、苦の真実の意味を探索しようとするひたむきさや、マイナスからプラスを生み出す強さを持つ。水野 (1991) は、人間は苦悩する弱い存在でありながら、「その弱さをバネにして他者へのケアに立ち上がる見事な生き方もある」のであり、知的・合理的な人間はこのホモ・パティエンス的な人間の生き方に学ぶ必要があると述べている。

Erikson et al. (1986) は「衰弱が支配的となったら、依存が妥当である」と述べているが、上で述べた受け身的な生き方の価値は、『自立』を経たうえでいわゆる『成熟した依存』(野々村, 1994)に通じるものであろう。ま

た、Fromm (1976) の主張する生き方の基本的な構えである「持つこと」(to have) と「あること」(to be) という言葉を借りれば、老年に至ってその構えを前者から後者へと転換するのではなく、若いうちからこの両者のバランスのとれた生き方の構えを心がけることが必要である。先述した Frankl の価値態度の考え方では、「三つの価値群の間を『弾力的に』行き来できる」(野々村, 1994) ような生き方ができることであり、そうすることで、いかなる状況におかれても、人は自分の生きる意味を見失うことなく価値を見出せるのである。

## V おわりに

Bollnow (1958) は、人間の徳というものとは追求することはできないものであり、「人間がただ自己を忘れて彼の道徳的目標を見定めているときに、気づかれずまた欲せられずしてやってくる」ものであるとしている。自己の向上・発展にばかり目を向けているときには得られず、無心になって他者をケアすることによっておのずと向こうからやってくるという人間の成長のあり方を心に置き、「ケアの精神」に満ちた社会を築くことが21世紀のわれわれにとっての課題の一つであろう。そのような社会を実現するためには、教育が重要である。具体的には、自分自身の価値観を各自が確認し明確にすること、しかし、それを押し通すのではなく周囲にも配慮して弱者とされる者の置かれている状態をありありと想像する力や、「声なき声」に耳を傾けることのできる豊かな感受性を持つこと、柔軟で創造的な思考力を持ち、誠実に理解しようと語り合い、調整し合う力を持つ人間の育成が望まれる。

### 〈謝辞〉

本論文は、佛教大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものです。修士論文作成にあたりご指導いただきました元佛教大学教授福原真知子先生に深謝申し上げます。また、加筆・修正にあたりご助言を賜りました佛教大学西之園晴夫教授をはじめ諸先生方に心より御礼申し上げます。

## 〔引用文献〕

- Bollnow, O. F. (1958) : Wesen und Wandel der Tugenden. 森田孝訳 (1983) : 徳の現象学—徳の本質と変遷. 白水社, 26 - 31.
- Bollnow, O. F. (1969). 浜田正秀訳 (1969) : 人間学的に見た教育学. 玉川大学出版部, 35 - 43, 134 - 137.
- Erikson, E. H. (1950) *Childhood and Society*. New York : Norton. 仁科弥生訳 (1977・1980) : 幼児期と社会 (1・2). みすず書房.
- Erikson, E. H. (1959) : *Identity and The Life Cycle*. New York : International University Press. 小此木啓吾訳 (1973) : 自我同一性. 誠信書房, 5 - 14.
- Erikson, E. H. (1964) : *Insight and Responsibility*. New York : Norton. 鎌幹一郎訳 (1971) : 洞察と責任. 誠信書房, 105 - 133.
- Erikson, E. H. (1968) : *Identity : Youth and Crisis*. New York : Norton. 岩瀬庸理訳 (1973) : アイデンティティ : 青年と危機. 金沢文庫, 371 - 418.
- Erikson, E. H., Erikson, J. M. & Kivnick, H. Q. (1986) : *Vital Involvement in Old Age*. New York : Norton. 朝長正徳・朝長梨枝子訳 (1990) : 老年期—生き生きしたかわりあい. みすず書房, 355 - 362.
- Field, T. (1978) : Interaction behaviors of primary versus secondary caretaker fathers. *Developmental Psychology*, 14, 183 - 184.
- Frankl, V. E. (1946). 霜山徳爾訳 (1957) : 死と愛 —実存分析入門. みすず書房, 32 - 107.
- Franz, C. E. & White, K. M. (1985) : Individuation and attachment in personality development : Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, 53, 224 - 256.
- Fromm, E. (1976) : *To Have or To Be ?* Harper & Row. 佐野哲郎訳 (1977) : 生きるとのこと. 紀伊国屋書店.
- Gelpi, E. (1973) : *Lifelong Education —The Dialectic Between Oppression and Liberation*. 前平泰志訳 (1983) : 生涯教育 —抑圧と解放の弁証法. 東京創元社.
- Gilligan, C. (1982) : *In a Different Voice : Psychological Theory and Women's Development*. Cambridge, MA : Harvard University Press. 岩男寿美子監訳 (1986) : もうひとつの声 —男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ. 川島書店.
- 平山順子 (1999) : 家族を「ケア」ということ—育児期の女性の感情・意識を中心に. 家族心理学研究, 13, 29 - 47.
- 廣松渉他編 (1998) : 岩波哲学・思想事典. 岩波書店, 343 - 344.
- 井上達夫・名和田是彦・桂木隆夫 (1992) : 共生への冒険. 毎日新聞社.
- 伊藤美奈子 (1993a) : 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討.



心理学研究, 64, 115 - 122.

伊藤美奈子 (1993b): 個人志向性・社会志向性に関する発達の研究. 教育心理学研究, 41, 293 - 301.

伊藤美奈子 (1993c): 発達理論の諸問題と新たなモデルの提唱—個人化・社会化を統合的にとらえる発達理論の探索. 神戸国際大学紀要, 44, 61 - 77.

伊藤美奈子 (1994): 個人志向性・社会志向性に関する縦断的検討とその変化要因についての一考察. 神戸国際大学紀要, 46, 93 - 104.

伊藤美奈子 (1997): 個人志向性・社会志向性から見た人格形成に関する一研究. 北大路書房, 63 - 75.

伊藤美奈子 (1998): 人間の発達をとらえる際の2志向性概念の提唱. 心理学評論, 41, 15 - 29.

伊藤美奈子 (1999): 現代青年における同一性と親密性との関連について. 心理学評論, 42, 35 - 41.

Ivey, A. E. (1986): *Developmental Therapy: Theory into Practice*. San Francisco: Jossey - Bass. 福原真知子・仁科弥生訳 (1991): 発達心理療法—実践と一体化したカウンセリング理論. 丸善.

Josselson, R. L. (1973): Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, 2, 3 - 52.

Josselson, R. L. (1992): *The Space between Us: Exploring the Dimensions of Human Relationships*. San Francisco: Jossey - Bass.

Josselson, R. L. (1994): Identity and relatedness in the life cycle. In H. A. Bosma, T. L. G. Graafsma, H. D. Grotevant & D. J. de Levita (Eds.), *Identity and Development: An Interdisciplinary Approach*. Thousand Oaks, CA: Sage, 81 - 102.

柏木恵子・若松素子 (1994): 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究, 5, 72 - 83.

川本隆史 (1998): 講義 共生ということ —ケアと共生. 川本隆史編, 岩波新・哲学講義6 共に生きる. 岩波書店, 22 - 30.

数井みゆき・無籐隆・園田菜摘 (1996): 子どもの発達と母子関係・夫婦関係: 幼児を持つ家族について. 発達心理学研究, 7, 31 - 40.

Kohlberg, L. (1984): *Essays on Moral Development Vol.2: The Psychology of Moral Development*. New York: Harper & Row.

Langeveld, M. J. (1958): 和田修二訳 (1966): 教育の人間学的考察. 未来社, 141 - 164.

牧野暢男・中原由里子 (1990): 子育てにともなう親の意識の形成と変容—調査研究. 家庭教育研究所紀要, 12, 11 - 19.

Mayeroff, M. (1971): *On Caring*. New York: Harper & Row. 田村真・向野宣之訳

- (1993)：ケアの本質—生きることの意味。ゆみる出版。
- 三枚奈穂 (1998)：成人女性における自我同一性感覚について —相互協調的・相互独立の自己観との関連から。教育心理学研究, 46, 229 - 239.
- 水野治太郎 (1991)：ケアの人間学。ゆみる出版, 23 - 26, 127 - 129.
- 村井 実 (1990)：道德教育原理 —道德教育をどう考えればよいか。教育出版, 133 - 134.
- 村田久行 (1994)：ケアの思想と対人援助。川島書店, 67 - 68.
- 日本道德性心理学研究会編著 (1992)：道德性心理学 —道德教育のための心理学。北大路書房, 145 - 156.
- 西之園晴夫 (1999)：教育実践の研究方法としての教育工学。日本教育工学雑誌, 23 (2), 67 - 77.
- 西之園晴夫 (2000)：教育技術の開発における研究方法論の考察。佛教大学教育学部論集, 11, 187 - 200.
- 野々村 昇 (1994)：「老いと死」と意味への教育。岡田渥美編, 老いと死 —人間形成論的考察。玉川大学出版部, 319 - 341.
- 岡本祐子 (1991)：成人女性の自我同一性発達に関する研究。広島中央女子短期大学紀要, 28, 7 - 26.
- 岡本祐子 (1995)：成人期のアイデンティティ発達における「関係性」の側面について —理論的展望と生活レベルに見られる2, 3の問題。広島大学教育学部紀要 (第二部), 44, 145 - 154.
- 岡本祐子 (1996)：育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究。日本家政学会誌, 47, 849 - 860.
- 岡本祐子 (1997)：ケアすることによるアイデンティティ発達に関する研究Ⅰ —高齢者介護による成長・発達感とその関連要因の分析。広島大学教育学部紀要 (第二部), 46, 111 - 117.
- 大野 久 (1984)：現代青年の充実感に関する一研究 —現代日本青年の心情モデルについての検討。教育心理学研究, 32, 100 - 109.
- 杉村和美 (1998)：青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し。発達心理学研究, 9, 45 - 55.
- 高橋裕行 (1988)：同一性と親密性の危機の解決における性差 —自我同一性地位のRasmussenのEISによる併存的妥当性の検討。教育心理学研究, 36, 210 - 219.
- 和田修二 (1980)：付録4 ランゲフェルドの人と思想。Langeveld, M. J. 講演 (1979), 和田修二監訳 (1980)：よるべなき両親 —教育と人間の尊厳を求めて。玉川大学出版部, 163 - 187.
- 和田修二 (1994)：教育の人間学。(財)放送大学教育振興会, 26 - 28.
- 和田修二 (1998)：私の出会った教育者と教育の本道 (二)。小原芳明監修, 全人教育 No. 604。玉川学園, 2 - 10.

- 和田修二 (2000) : 生涯教育論再考—共生と共成の生涯教育に向けて. 佛教大学教育学部論集, 11, 35 - 48.
- 渡部雅之・小野真由美・小島道子 (1996) : 乳・幼児を持つ母親の心的特性に関する研究 —「母親であること」の人格的成熟と親的特性の夫婦間補完性について. 滋賀大学教育学部紀要, 46, 49 - 66.
- 山本里花 (1988) : 女子学生の自我同一性に関する研究 —自我の二指向性の観点から. 教育心理学研究, 36, 238 - 248.
- 山本里花 (1989) : 「自己」の二面性に関する一研究 —青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討. 教育心理学研究, 37, 302 - 311.

### 〔参考文献〕

- 福丸由佳・無籐 隆・飯長喜一郎 (1999) : 乳幼児期の子どもを持つ親における仕事観, 子ども観 : 父親の育児参加との関連. 発達心理学研究, 10, 189 - 198.
- Jung, C. G. 高橋義孝訳 (1977) : 無意識の心理. 人文書院.
- 木内亜紀 (1995) : 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 66, 100 - 106.
- 木内亜紀 (1997) : 女子大学生とその母親の相互独立・相互協調的自己観—質問紙法による形成要因と葛藤状況の比較検討. 教育心理学研究, 45, 183 - 191.
- 河野利津子 (1993) : 親役割に関する研究 —母親の就労と父親の家事・育児参加. 比治山女子短期大学紀要, 28, 89 - 96.
- Matteson, D. R. (1977) : Exploration and commitment : Sex differences and methodological problems in the use of identity status categories. Journal of Youth and Adolescence, 6, 353 - 374.
- 村松幹子・新谷由里子・牧野暢男 (1990) : 親の変化とその規定因に関する一研究. 家庭教育研究所紀要, 15, 129 - 140.
- 村山久美子 (1987) : 女性心理学入門. 誠信書房.
- 小野寺敦子・青木紀久代・小山真弓 (1998) : 父親になる意識の形成過程. 発達心理学研究, 9, 121 - 130.
- Schiedel, D. G., & Marcia, J. E. (1985) : Ego identity, intimacy, sex role orientation, and gender. Developmental Psychology, 21, 149 - 160.

(やまもと たかこ 教育学研究科博士後期課程生涯教育専攻)

